

Cテーブルグループ討議 目次

1回目	2
------------------	---

<出席者>

安野 貴博 委員
伊住 禮次朗 委員
仲田 匡志 委員

2回目	8
------------------	---

<出席者>

池坊 専宗 委員
大竹 莉瑚 委員
杉田 真理子 委員

3回目	14
------------------	----

<出席者>

大井 葉月 委員
田口 成人 委員
三川 夏代 委員

第1回京都市未来共創チーム会議
Cテーブルグループ討議
議事録

テーマ：未来の京都に必要となること

Q3.

2050年にも京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらえるまちとなるために必要なことはなんですか？

1回目

＜出席者＞

安野 貴博 委員
伊住 禮次朗 委員
仲田 匡志 委員

仲田委員

1つ目は、「そもそも」というキーワードにした。京都で生まれ育った方から、京都の人はそもそも世界の人に来てほしいとは思っていないと聞いた。大前提として、世界の人に誇りや憧れを持ってもらうという意味合いから考えることが大事なのかどうかという疑問を感じた。

今回の京都市民の定義がそもそも住居ではなく、京都に関わっている人、京都を愛する人ということだと思うが、この対象は一体誰なのか。問いにある世界の人とは一体誰なのか。そもそもその方々に、京都市民として憧れと誇りを持ってもらいたいと思う気持ち自体が大事なのかと思った。そっけない方がよいという意味ではなく、届けたい意味を私たち自身が知ることが重要だということである。

2つ目は、動機付けである。何のためにという動機があるかどうかによって、市民の行動も変わってくるだろう。特に我々よりも下の世代の京都市民の方々は、主語が京都であることに對する意味合いを大切にしてくださると思っている。京都市民には少なからず、京都は私であり、私は京都であるという感覚があると思っており、その感覚をどうすれば育めるのかということも大切な問いではないだろうか。

3つ目は、京都を知ることである。そもそも、京都は何かということを経験の中で、感覚として捉えられているかどうか。特に今回は、「京都市民が愛し」ということなので、子どものためなら命に代えてでも守ることを愛だとするならば、京都のために私たちは命を捨てることができるのか。「愛する」という言葉を使うのであれば、そのぐらいの覚悟が必要である言葉を今回使っていることに對して少し気になった。私と京都の間には愛があるのか、好きなのか、どういう関係性なのかということを考えることが大事かと思う。

伊住委員

先ほどの事務局からの説明の中に、私たち京都市民という主語に関する話もあったが、関係人口や周りを取り巻く人たち、仲田委員がおっしゃったような京都が好きという思いを持って京都で活動している人たちもいて、その人たちを含めて京都というまちが成り立っている。もちろん、観光客もその中に含まれる。

私は観光客との関係性をキーワードとして書いた。観光客に来てほしい気持ちはあるけれども、キャパシティを超えている領域が圧倒的に増えてきている。交通もそうであるし、私たちお茶の世界に関しても、明治時代以降、たくさんのお客さまを入れるような大寄せの茶会という大人数のお茶会がポピュラーになってきた。そうになると、一人一人とのコミュニケーションが薄くなっていく。

そして、一人一人との接点が薄い状態がずっと続いていくと、愛するという気持ちも薄れていく。そうすると、担い手が減っていくという状況の中で、京都というものを自分の主語として捉えるような人が確実に減ってくると思う。そういう意味では、観光客や京都を訪れた人一人一人が、どれだけ京都でインパクトのある出会いができるかという関わりの濃さが重要である。

現在、それぞれの分野において、どれほどの関わりを提供できる状況にあるかということをしっかり考えていかないと、ただ入っては出ていくという繰り返しだけが生まれることになるので、何かその中に積み重なるものがあってほしい。

何かが積み上がって、京都になっているわけなので、入ってきて出ていった時に、その人の偉功や偉績のようなものが京都に何か残っているはずである。そういったものの積み重なりが、ハードであれソフトであれ、京都を形づくっている。ただ入って、消費して帰っていくだけということが、目に見えて多くなっていると思うので、何が積み上がっているのかということを考えるべきではないか。特に地元の人たちは、海外の方を含めて、観光客がたくさん来ても自分たちに還元されている気がしないというのが、最も強く思われているところではないか。

仲田委員

消費ではないというのはポイントである。京都は消費してこなかったから、ずっと文化が今も続いている。

伊住委員

全て地続きでいけるか分からないが、2人の子どもがいる立場なので、子育て世代が京都市から出ていっている感じがする。人が増えていても定着していないというのは、京都市に住みたい気持ちを持った世代、もしくは本来はそうであるべき世代が市外に移っている感じがする。住む場所ではないかもしれない、と思われているので、その世代をどう定着させるのかということは、次の世代につなげていくためにも重要である。

仲田委員

このまちに住むという市民としての誇りである。

Cテーブルファシリテーター

住む場所ではないと思われているのではないかというのは、京都はどのようなまちだと思っているのか。

伊住委員

消費しに行く場所、かもしれない。遊びに来て楽しい場所であり、おいしい食事処がたくさんあるなど、何か体験して楽しい場所はたくさんあるが、そこで根を下ろして家族で住むという選択は少なくなっているのではないだろうか。

交通の便の面においても、私の実家近くには金閣寺道という大変混雑するバス停しか交通機関がない。それ以外には自転車か車でしか動けないので、通学の時間帯などは、観光客で混雑する中、ランドセルを背負ってバスを利用するのはかわいそうだなと思う。

それから、まちとして重要だと思っているのは都市の奥行きである。京都の文化の面白さは、目に見えるものの裏側にある歴史や時間軸のようなものだと思う。だから、見て、「あ、きれいだったな」で終わるのではなく、全然自分が入り込めていない領域がたくさんあるような感じが、京都の奥行きだと思う。その部分が全てオープンになってしまうと、「もう京都が分かった」となってしまうので、京都にはミステリーゾーンのようなものがあるべきではないだろうか。そういう京都であれば、ずっと人を惹きつけ続けるだろうという意味で、このキーワードを挙げた。

もう一つは、都市のスクリーニングである。京都というまちを通したら、例えば京都という環境の中で自分の作品を発表すると、何となく京都らしいものが出来上がるという状況は、環境がつくり上げている部分もあるのではないか。その環境が少しずつなくなっている。京都の町家なども含めて、古い建物がなくなっており、新しい建物は少し美観に優れたものとは言えないものも出てき、少しずつそういう環境が失われているのではないか。都市計画の中でのスクリーニングのようなものがきちんと機能している京都であってほしい。

一方で、京都らしさのようなものとは全く異なる非京都らしさを受け入れてきているのが京都でもあると思う。例えばニンニクを使わないギョーザが京都の中華だという話があれば、こってりしたラーメンが生まれ、それもいつの間にか京都っぽいと言われるようになっていくなど、真逆のものが京都らしさになる時もある。全然違うものを受け止める懐の深さのようなものがつくり上げている京都もあるので、京都らしさを議論する時には特にその点に気を付ける必要がある。

仲田委員

不易流行にも通じる話である。

伊住委員

そうかもしれない。常に回っている何かがあり、コアのところで固まっているところがあり、その2つが京都を成り立たせているので、変わらないものだけが京都ではないということは、皆が共通して理解しておくべきではないか。

Cテーブルファシリテーター

都市のスクリーニングという話は、先ほどの単なる観光や消費ではなく、関わりを持つことに近いだろう。京都を通る方は、観光客もスクリーニングされている対象になっているのか。

伊住委員

本来はそうあってほしい。

Cテーブルファシリテーター

学生などは、割とそうだということか。

伊住委員

そうである。例えばお寺に拝観して、靴を脱ぐ文化がない人たちもいるが、説明されていなくても、何となく脱いで入って、庭に下りてはいけない雰囲気を感じ取る人たちは一定数いる。それは、守っている周りの環境がそうさせているところもあるので、そういった明言化されていない力のようなものが環境をつくり上げているのだと思う。

仲田委員

このスクリーニングの基準が変わり始めたことが、課題になっている感覚はあるかもしれない。

伊住委員

それはあるかもしれない。

仲田委員

観光、つまりおもてなすという部分でもありつつ、おもてなすというスクリーニングの基準が、増えたのか、減ったのか、変わったのかによって何か今のオーバーツーリズムと言われる課題があるような気がする。

Cテーブルファシリテーター

続いて、安野委員をお願いします。

安野委員

今のスクリーニングの話はとても面白いと思って聞いていた。私の1つ目は、「圧倒的な差別化志向」である。京都に対して、他のまちと同じようになろうという平均化する圧力のようなものがあるような気がしており、そこにしっかりと抗っていくべきではないか。普通のまちはこうやってつくるというやり方をせずに、圧倒的に差別化したまちをつくっていくのだということを思うことが重要である。

スクリーニングは、人によっては傲慢だと捉えられるかもしれないが、そういうスクリーニングをしていくことは、一つの方向性としてあるかもしれないと思っている。

もう一つは、秘密結社感である。これは、ある種の傲慢さのようなものとすごく相性がよいし、今までの京都の延長線上にもあると思う。ラディカルに言えば、世界中の人の秘密の社交場のような側面があってもよいのではないか。京都というインナーサークルに入れていることが誇りなのだというやり方もあるかもしれない。

伊住委員がおっしゃった関係性のつくり方はその通りだと思った。京都に住んで、しっかり根を下ろすというつながり方もあるが、それは京都の面積が変わらない限り、キャパシティに限界がある。限界に達しつつある中で、薄いつながり方のようなものが必要になるのではないだろうか。薄いつながり方とは何かと考えた時に、自分の人生と京都を結び付け、自分事になるようなものをうまくつくることができると思う。

最後のデジタルデモクラシーが何かというと、つながりのある人たちが増えていくと、京都をこのようにしていこうとみんなで話し合っ決めていくことが困難になっていく。そういう時に、薄くつながっている人たちを薄く巻き込み、濃くつながっている人たちを濃く巻き込みつつ、まちのコミュニティとして意思決定する仕組みは、今までの民主主義の延長線上として、デジタルな民主主義にすることで、もう少し広い目をつくることもできるのではないか。

Cテーブルファシリテーター

安野委員はデモクラシーの主体となる市民をどのように捉えているか。

安野委員

まさにそこが重要である。新しい関係や薄いつながりをつくらないといけなくなった時に、薄くつながっている人も、ある種の主体として捉えた方がよいと思っている。現在は、基本的には住んでいる人が1つ権利を持っており、住んでいない人は全く権利を持っていないが、そこをもう少し滑らかに、0.01だけ権利を持つ人がいてもよいのではないか。

伊住委員

今の話で言うと、住んでいる人は否が応でもこのまちを愛する人たちであるから、住んでいなくて、動いている人たちがどのように京都に対してアプローチできるか。逆に返ってくるものがあるのかというところが重要だと思う。

特に京都は学生も含めて常に動き続けているまちだからこそ、0.01の権利が付与さ

れるという考え方もあり得る話だろう。住んでいる市民に比べると関与は少ないかもしれないが、ゼロではないはずである。

仲田委員

一見さんお断りをどう開くのか、どう扱うかの話につながるのではないかと。一見さんお断りは排除するのではなく、この店やこのまちの楽しみ方が分かる方の紹介や信頼で成り立っているとすると、信頼という言葉に、何かヒントがあるのではないだろうか。

伊住委員

それは、限界を超えた数を絶対に入れないという考え方ではないか。だから、コアな部分ではキャパシティをきちんと守り、周りの動いている部分がいかにせり上がっていくかという2つの主軸があるのではないかと。

仲田委員

まさにそれが0.01と0.05などという権利や機会を広げて、動いている方々が来やすくするのか。このさじ加減が今問われているのではないかと。

伊住委員

特に京都は日本の中でも特殊なまちであり、文化財も多いので、京都を盛り上げようと思ってくれる方は、市内だけではなく、たくさんいるはずである。本当は観光客が来れば来るほど地元の文化財保護につながっている形でないかと、納得感は得られない。そうでないと消費されているだけになってしまう。そこから得た何か財をもって、文化財保護に当てるという考え方があるべきではないだろうか。

安野委員

消費したいと思う人が増えるのではなく、その文化財を守りたい、継承したい、広めたいと思う人を増やすが必要である。

2回目

<出席者>

池坊 専宗 委員

大竹 莉瑚 委員

杉田 真理子 委員

池坊委員

先ほどのテーブルでも話題に出たが、観光客と地域住民の衝突というか、様々な不便が起きている。それで、観光客にも主体性というか、京都を創造する一端になってもらおうということだが、京都の濃いところも大事である一方、入り口が狭いという話もあった。なので、それぞれの層に分けて、層ごとに関わりの深さが変わるような入り口をたくさん設けるとよいのではないかという意見が出た。京都市民には京都市民の責任ややりがいがあり、何回も京都に来るような、京都が大好きという人には京都の文化の醍醐味を本格的に体験してもらう。京都が初めてという人には、本当にカジュアルな入り口をつくりつつ、観光地に行くだけで終わらないように京都との接点を持てるようにしていくとよいのではないかと考える。多層的に様々な入り口がある方が面白い。

大竹委員

観光に関して言えば、観光客の視点からどういうまちかというのが見えてくると思っている。観光客が行く場所はおそらく何十年前から変わらず、寺社仏閣である。それは京都の良さである一方で、寺社仏閣以外に何も魅力がないということかもしれない。単にお寺に行くことが消費に近い観光だとすると、同じ場所にしか行っていないということに課題があるので、そこで何か生み出したり、まち全体が魅力にあふれていたり、いわゆる観光資源のようなものではない何かがあるとよいのではないか。それは観光客が訪れる場所を見ると分かることかと思う。

池坊委員

特にあまり京都を知らない人は、どのお寺も似ていて一緒であると思い、1箇所訪れると「疲れたから、ご飯に食べにいこう」という感じではないだろうか。だから、そういった観光客目線での情報発信ではなく、京都が京都のよいところを見つけて、お寺でも様々な解像度や、シーン、魅力があるので、お寺を一つ取ってもいろいろな提案ができる。そして、お寺や京料理はこういうものだろうという認識から脱したほうが、観光の魅力も分散するし、豊かになるのではないだろうか。

杉田委員

私も、マスツーリズム型、消費型の観光から創造型の観光・滞在へというキーワードを書いた。現在、まさにこの消費型ではなく、創造型の観光や滞在をどう後押しできるかと

いうプロジェクトに京都市と取り組んでいる。

見て、消費して、お金を使って終わりではなく、より地元の人と会い、コラボレーションにつながるような機会があり、その滞在が次のポジティブなものにつながっていくための観光の在り方、京都に来てもらう在り方をデザインしていくべきではないか。

そして、観光客からのフィードバックできるものがあるのではないかという大竹委員の意見については、まさにそのとおりだと思う。実際に、非常に混雑しているお寺などに行き、周りに耳を澄ませると、観光客の多くは「人が多過ぎて疲れた、帰りたい」などネガティブなことを話しており、そういった声をきちんと拾っていくようなことをどうデザインできるのか考えていた。

Cテーブルファシリテーター

観光以外のキーワードを挙げた方はおられるか。

大竹委員

私は、手放すと書いた。京都らしさを損ねているものとして、情報過多と書いたことにもつながるが、京都はいろんな点において豊かな分、余白がない印象を持つ。何かを生み出すには、何もない場所や、ただ考えられる場所などの余白も必要だと思っている。まちのつくりに関しても、密度が高く、京都で働いている人も余裕がなさそうである。

もう一つ、「ないをあるに」というキーワードを書いたが、これは何かを買うといった消費型から、自分からつくる、生み出す、活用する、巡らせていくイメージである。

池坊委員

私は、新陳代謝への支援と書いた。今の京都は東京のミニチュア都市のような、単純に便利になるだけの既視感のあるまちというか、京都の魅力が薄まってきたと感じる。外資も入り、京都の伝統のリブランディングも盛んで、それは盛り上げるために悪いことばかりではないと思うが、短期的なリブランディングや焼き直しはすぐに廃れていく。

京都の昔ながらの融通があまり利かない灰汁の強い感じが、京都の大変な部分でもあるが、良さでもあると思う。ただ、そういう人たちは今のメディア戦略において、人々に触れる機会や方法があまりないので、そういう灰汁の強さを残しながら、行政がそれらを補っていくようなことができないかと思う。

例えば鴨川も、昔は私もよく野球をやっていたが、整備が進み、表面上はきれいになってよいが、次第に京都の原風景や濃さが失われているような感じがする。継ぎ足しのたれが100年続くためには、当初から残る謎の沈殿物があるように、そういった濃い部分は残していくべき。

Cテーブルファシリテーター

1回目の議論の中に、圧倒的差別化志向を持つべきという話があった。東京のミニチュア都市を目指すべきではないという話にも近いと思うが、京都しか持てないものは何なの

かを自分たちで考えることが重要ということだろうか。

池坊委員

そう思う。京都歴史が長く、御所があり、公家がいらっしゃり、寺社仏閣や様々な流派があるなど、これほど蓄積された都市は世界中にもなかなかないので、東京のような便利な大都市を目指すべきではない。

Cテーブルファシリテーター

先ほどの差別化の在り方が、大竹委員がおっしゃるように、何か足していくのではなく、引き算ではないかという仮説が成り立つかもしれない。

池坊委員

それは面白い。このようなサービスがあればよいと言って、便利にばかりしていくのではない。

Cテーブルファシリテーター

総合計画を作っているけれども、無計画を計画する感じがよいということかもしれない。

池坊委員

計画的過ぎると、京都に少し合わない感じがする。

大竹委員

そう思う。

杉田委員

私もそのような感じがする。先ほどのテーブルでも、カウンターカルチャーの話があったが、そういったボトムアップでつくられていく方が正しいと思っている。ブランディングにおいても、安易に他の成功事例の型にはめるなど、海外に追随するようなことは向いていない。何でも無計画であればよいわけではなく、トップダウンの計画が合わないという意味である。

大竹委員

私も同感である。京都には面白い人がたくさんいて、クリエイティビティがあるまちだと思うので、大まかな方向性を共有することは大事だが、具体的にどのようなアクションをするかなどは、個人に委ねてもよい。

杉田委員

そういう意味では、リーダーシップの多様性にも関わってくるが、面白い人がたくさん

いるから、彼らをきちんと輝かせることが重要である。例えば、精華大学の元学長であるウスビ・サコ氏は、アフリカ出身の方で初めて日本の美大で学長になられたが、そういう多様な声を持っている人がリーダーシップの場、意思決定の場にいることは非常に大切なことである。

政治においても、商工会や商店街組合、町内会などにおいても、外国籍の方、海外にルーツを持つ方や、女性など、いろいろなバックグラウンドがある方が参画すると、京都はカッコいいなとなると思う。日本の政府があまりできていない状態だからこそ、地方都市の京都が率先することで、世界に誇れる京都になるような気がしている。

C テーブルファシリテーター

みなさんの意見を聞く中で、多様性と計画は両立するのかということが、自分の中で少しわからなくなってきた。

池坊委員

土地を耕す方向で頑張ってもらって、そこで雑草が勝手に生えてくるような感じだろうか。

大竹委員

これまでの話を聞いて、無計画をデザインするという言葉が思い浮かんだ。面白い人は勝手に現れるわけではなく、京都に行ったら面白い人がいると思われることがまちの魅力につながる。物を見て消費するのではなく、人やコミュニティがあると他の楽しみ方ができる。

杉田委員

無計画をデザインするという言葉はとてもぴんと来た。私が最近注目しているスピーシーズというプロジェクトがあるが、そこでもコントロールできないことをデザインするというような話が出ている。

その文脈でいくと、人間以外のアクターも入れるべきだと思っており、リジェネラティブシティへの転換というキーワードを書いた。言葉としては、リジェネラティブシティや、サステナビリティ、循環都市などいろいろな言い方があってもよいと思うが、これからの都市を考えていく上で、人間だけではなく、植生や自然、動物や微生物など、最近で言うと、マルチ・スピーシーズ・モア・ザン・ヒューマンのようなコンセプトで言われると思うが、そういった部分も加味した都市のデザインを考えていけるとよい。

ワイヤード・ジャパンも、今月、リジェネラティブシティがテーマで国内外の様々な事例を紹介しているが、京都ももっとできるのではないかとと思っている。例えばグリーンスペースのような具体的な話から、モビリティなど広い視点でディスカッションできるトピックなのではないかと思う。

Cテーブルファシリテーター

微生物や京都でできたA I も広い意味で市民として捉えるという発想につながってもよいと思った。

大竹委員

「ないをあるに」という話に近いと思っている。例えば生物もこれまでから存在していたが、市民としてカウントしていなかったもので、ないことと一緒にある。そういう今まで目を向けていなかったところに、京都の可能性があるかと思う。価値観が豊かであると、そういうものがどんどんできるようになっていくので、何か箱物をつくるようなことではなく、コミュニティなどもっとソフトなものをつくり出していく風土の方が大事ではないか。

観光や交通においても、ハード面をどうするかではなく、もっと助け合えるような雰囲気をつくることができればと思う。私は先ほどのテーブルで車椅子の話をしたが、車椅子で京都など歴史的なまちは観光しにくいし、どのように観光すればよいか案内できる人が少ないし、バスも人が多くて乗れないということがある。そういったどうしても変えられない部分が出てきてしまうが、人が優しくなったら、できることがたくさんあると思うので、ソフト面の何かがあったらよい。

池坊委員

箱物などではなくて、無形のものや、体験で京都の底力を養っていくことは私も賛成である。先ほど、微生物の話もあったが、京都に住んでいる若い人の、京都の文化や、昔から引き継がれている暮らしや自然に対する解像度が非常に下がってきていると感じる。

例えば、マツを全く触ったことがないと、能舞台のマツを見ても、あれは何の植物だとなるし、京都が三方の山に囲まれて鴨川が貫いていることも、実際にその空気を吸って感じていないと、なかなか教科書で分かる話ではない。

和室などの文化や自然も含めて、関わって体験していくような機会を増やしていかないと、文化同士の距離も遠のいているし、京都人自体が体験しないことには、説得力を持って人に発信できない。コケが猛暑により、枯れてきているといったことは肌感覚で分かっているものである。どんどん触れる機会が増えるとよいと思う。

Cテーブルファシリテーター

時間が来てしまったが、これだけは言っておきたいことがあればお願いします。

杉田委員

私はウォークアブルシティへの転換である。

大竹委員

私は、ハブの創出と、あちこち行き来する人材の創出である。行政の方でも市役所の中

で仕事をしているだけではなく、地域企業へ行くなどしているとは思いますが、例えば3社同時に就職するといったことができればよいと思う。私もそうできるように今準備しているが、あちらこちらで何かをして、つなげていくような人がまち中にたくさんいたら面白いと思う。

池坊委員

業界や領域を横断していく人材が増えるとよい。私も伝統工芸をしているところを回る中で、ファッションの業界で働いていた若い女性で、今は和傘を作っている方に出会ったが、そういう大胆なジャンプはとてもよいと思った。

大竹委員

つなげる人がいると、「ないがある」になると思う。

3回目

<出席者>

大井 葉月 委員

田口 成人 委員

三川 夏代 委員

三川委員

1つ目は、変化を拒まないという心持ちである。先ほどのテーブルでも話をしていたが、京都らしさを過去から現在、さらに未来に引き継いでいく時に、京都の内にある文化は守ったり、引き継いだり、あえて変化させないということもあると思うが、外の文化も取り入れながら共生していく必要があると思う。京都らしさを守るという気持ちも大切だが、外のものを取り入れながら変化するという心持ちも必要ではないか。

2つ目は、豊かさの物差しをつくることである。このテーブルの問いは難しかった。世界の人に誇りと憧れを持ってもらうとあるが、何の誇りと憧れを持ってもらう必要があるのか、観光地や経済都市としての誇りと憧れなのか、暮らしやすさとしての誇りと憧れなのか、いろいろな軸があると思っている。

まずはその目線合わせが重要で、京都らしさにも置き換えらえると思うが、目線合わせができた時に、京都らしさがいくつかある中で、それぞれどのくらい満たされていると、自分たちは誇りと憧れを持てるのだろうかという物差しが必要かと思う。この物差しができると、いろいろな人との共通認識にできると思うので、きちんと言語化する必要があるのではないか。

Cテーブルファシリテーター

先ほどの議論においても、そもそも愛されたり、誇りに思ったりする方がよいのかという意見があったが、それに近い問いかけかと思う。豊かさの物差しは、市民として一本化された方がよいのか、多種多様な豊かさをみんなが持っていることでよいのかどちらだろうか。

三川委員

1つでないといけないかは分からないが、前者かと思っている。基本構想に6つの得意技が書かれており、素晴らしいとは思いつつ、世界の人に誇りと憧れを持ってもらうための6つの得意技かということ、若干飛躍していると思うので、それを自分事としてどう置き換えるのか。もしかすると、1つではない可能性もある。

Cテーブルファシリテーター

それは東京の豊かさとは違う、京都ならではの豊かさのようなイメージか。

三川委員

そうである。

Cテーブルファシリテーター

何か仮説のようなものはあるか。

三川委員

全くないが、ヒントはAテーブルとBテーブルにあるのではないか。

大井委員

三川委員の意見に関連するので続けると、私もこの問いを見た時に、世界という言葉があることでとても難しいと思った。私はずっと京都にいますが、この未来共創チーム会議への参画を機に、京都のこれからについて考えるようになった。従って、まずは京都について知ることができ、話し合え、共有できる場が必要なのではないかと思う。豊かさの物差しの話をここにつなげられるとよいかと思った。

2つ目は、先ほどの変化を拒まないというところで言うと、私自身、東山区で働いていて、オーバーツーリズムの問題がどうしても挙げられるが、そもそも観光客へのポジティブな思考が必要ではないか。観光客との関係性という話にも近いと思ったが、ネガティブに思われがちだが、世界を考えた時に、京都の良さや、新たなつながりが生まれるよい機会になるのではないかと思う。

3つ目は、子どもや若者がつくるコミュニティを大切にすることである。子どもを大事にしようと言われてるが、そもそもその子どもや若者がつくるコミュニティという最初の段階で、ワクワクできることや日常生活を行政や地域が拾っていけるようになれば、そこでつながりが生まれ、京都愛のようなものが深まるのかと思った。

Cテーブルファシリテーター

1つ目の京都について知ることができる、話し合えるのは大井委員にとっては誰だと思うか。

大井委員

京都への愛と考えるのであれば、京都市民の方でも、全く京都のことを知らない人や、全く言葉が通じない人でも誰でもよいかと思う。

田口委員

世界の人に誇りと憧れを持ってもらおうとあるが、とはいえ70億人に愛されるのは無理だと考えると、自分たちがまちやそのまちに住んでいる人や関わっている人が好きであって、そうしたこと自体に憧れを抱かれるようなことがよいのではないかと思う。まちをつくっている側が、自分たちでこのまちをつくったのだと思えるのかどうか、自分たちの

誇りにつながるのではないか。つくるというのは、引き継ぐなどいろいろな形があると思うが、そういう意味では、先ほどの変化を拒まないという話もそうだが、新しいことを自分たちでやった、自分たちで決めたという経験は重要である。

大井委員

まさにこの場がそういった場になっているのではないか

田口委員

そのように思う。もう一つは、先ほどのテーブルで、洗練された手づくり感ということをおっしゃっていた委員がいたが、工芸品も伝統もそうだが、優れた仕事があり、それを普段目にして、目利きを身につけて、それをまた新しい人がつくっているように、裾野を広げればトップも高くなるのではないかと考えている。何かを始める時のツールのようなものに対するアクセスが容易であれば、自分たちで何かつくっていくようなことができ、引いては誇りにつながる。

Cテーブルファシリテーター

裏を返すと、これが今足りていないということか。

田口委員

そう思っている。先ほどのテーブルでは、閉鎖性は京都らしさを阻害しているものと言う人もいれば、京都らしさだと言う人もいた。閉鎖性といっても、完全な閉鎖性ではなく、関わろうとする人に対しては、開かれている気もするので、そういう取っかかりを忘れないようにしたい。

Cテーブルファシリテーター

先ほどの回で、一見さんお断りに関する議論があったが、それとも近いのか。

田口委員

そうである。

Cテーブルファシリテーター

一見さんお断りは、京都らしさの秘密結社感があってよいという話もあったが、開かれた方がよいと思うか。

田口委員

両立するのではないか。一見さんお断りだから開く意味があるというか、そこが二項対立になってしまうと面白くなってしまふ。完全にオープンでフラットだと、結局は誰も関われないような気がする。

三川委員

受け入れる側も選ぶ権利があるし、扉を開く側も選ぶ権利があるというのは、一見さんお断りのよいところかもしれない。

少し話がずれるが、改めて問いを見ると、誇りはとても理解できるが、憧れを持ってほしいと言われると何か違う気がする。どちらかという、親しみを持ってもらう方が京都らしいのではないかと、今の話を踏まえて感じた。

憧れは、憧れの対象として見られて終わってしまうが、親しみは、一見さんお断りの文化があるように、自分はどうやってそれに関わろうかと、関係値を築く一つの物差しになるのではないかと。憧れではなく、親しみを抱いてもらうことによって、京都がもっとオープンになるというか、より魅力が増すと思った。

Cテーブルファシリテーター

憧れは上下の関係で、親しみは横の関係のイメージが少しあるということか。

三川委員

そうである。A、Bテーブルで話していた時に、コミュニティの大切さや人とのつながりがある点が京都らしさに挙がっていたことを踏まえると、そこに観光客や移住者がどうアクセスするのか。その時に、憧れではなく親しみを届けた方が、よりよい京都になる気がした。

田口委員

住んでいる人と関わっている人が満足している状態が続いていくのであれば、世界の人に憧れられる必要はないのではないだろうか。先ほど、世界に発信するための基本構想という話があったが、それはあくまでツールであり、それによって京都らしさをどう残していくかが重要である。何のために憧れや誇りを世界の人に持ってもらう必要があるのかというのは、考えてもよいかもしれない。

三川委員

京都市民は憧れられたいのだろうか。

Cテーブルファシリテーター

もうすぐ時間となるが、言い残したことなどないか。

三川委員

都市のスクリーニングと書かれているが、これはどういった意味か。

C テーブルファシリテーター

京都というまちが人生のある種スクリーニングになっており、大学4年間、京都を通して、どこか別のまちに行ったとしても、京都の何かを通してきたことで、自分の中に注入された経験が植え付けられて、人生観が変わっていくというような魅力があるのではないかという話をしていた。

だから、観光客は、京都を消費して出ていくが、消費するだけではなく、京都の何かを持って帰って、京都の仲間を増やしたり、人生のどこかで京都に関わったりするようになるとよいという話からこういった議論が展開された。

安野委員からはデジタルデモクラシーというキーワードが出たが、京都市民だけでなく、そういうスクリーニングされた人も関わることができるという意見や、京都のことを考えるのは京都市民だけでよいのかという意見も出ていた。